3 令和6年度 兵庫県立加古川西高等学校 各部・学年の総括

	本年度の目標	目標実現のための具体的な取り組み	自己評価 A:できている B:少しできている C:あまりできていない D:できていない	今年度の振り返り （各目標に対する評価に対して、その成果・課題）	次年度に向けた改善策
総務図書部	学校行事の効率的な準備と運営	各学年や他の部署と連携を図り、スムーズに行事が進むようにする	A	学校行事に関しては、他の分掌・学年と連携をとりながら進められた。普段から他の部署と共通理解を持つことが大切であることが、改めて感じられた。また、行事検討についても、新しい意見を取り入れながら、計画を進めていくことができた。特に、81回生の修学旅行について、行先・期間を決定できたことは大きかった。	今年度の振り返りを踏まえ、次年度もさらにスムーズな行事計画、運営を目指していきたい。そのためには、常にすべての部署との連携を念頭に進めていかなければならない。
	地震・洪水等への対応 不審者への対応	地震・火災に対する避難行動だけではなく、大雨による洪水や地震による津波への対策マニュアルを作成する。 不審者対応マニュアルを新たに作成する。	B	今年度も、マニュアルの再度の確認を行った。特に、不審者対応について、加古川警察と連携した訓練ができた。非常時、刺股の使用などの難しさをあらためて確認できた。防災避難訓練では、保健部と協力して災害弱者の対応について実施する。	防災については、予想される南海地震時の対応について、教科の指導と連携しながら深化させていく必要がある。生徒が正常性バイアスに惑わされずに行動できるように指導する。
	人権教育の推進	本校の学校教育目標である、『生命の尊厳、自然への畏敬の念、他人への思いやり、感動する心』を養い、知・徳・体の調和のとれた豊かな人間性を育成することの根幹をなすものとして人権教育は非常に重要であり、従前より熱心に取り組んできた。 本年度は、「確かな人権意識を身につけ、差別なき社会の形成に積極的、意欲的に貢献できる人間を育成する。」ことを人権教育の重点目標とする。	B	本年度も、1年が様々な人権問題について、2年が同和問題について、3年が就職差別等について取り組み、生徒の人権意識を高めることができた。また、指導することが教師の研修にもなり、指導力が向上している。 県の研修会で得られた内容や東播磨地区人権教育研究協議会での取組の内容を、次年度に活動に生かしたい。	各学年で計画された人権教育活動をさらに進めるとともに、LGBTQやヤングケアラー問題についての取組を行っていく。ヤングケアラーの問題については、生徒指導部や学年と情報共有し、実態の把握に努める。
	図書室の環境整備	新刊を随時配置し、書架整理を進めていく。「読書感想文コンクール」への応募や、「読書会」・「出張図書館」を企画し、本に親しむ機会を増やしていく。	A	新刊の案内は、「図書だより」を通じて各クラスに掲示している。今年度は、1・2年生の協力により、「山火事予防の標語」に取り組むことができた。昨年度から始めた「朗読会」は、今年度は希望者全員で取り組むことができた。2回実施した。BGMをかけながら、アットホームな会となった。 「貸出図書」は、各クラスの図書委員が選んだ本を教室前に置くという取り組みで、本に少しでも親しむきっかけづくりとなった。図書室での取り組みは、図書委員や希望者対象のため、学年の枠を超えて、交流を深めることができた。	家庭学習や部活動で、読書時間の確保が難しい環境にあるが、図書委員会活動を通じて、少しずつでも本への関心を高める取り組みを行っていきたい。
教務部	3年間の取組より教育課程を検証する	1～3年と実施した教育課程検証し、改善を図る	B	新課程における大学入学共通テストが実施され、入試の概要がわかってきた。入試対応だけでなく、スクールポリシーに応じた教育課程の検討を継続している。	「DXハイスクール」に指定され、ディジタル人材を育成するための教育課程の検討および、各類型の課程の改善点を検討したい。
	観点別評価の適正化をはかる	各教科の評価法を共有し、教科の独自性を保ちながらその評価方法を検証し、改善する。	B	3学年とも観点別評価が実施され、全職員が評価するようになった。改善点をデータ化し教科で検討を続けている。	「観点別評価」と「評定」についてデータ化し、検討を続け改善を図る。
	BYOD活用した授業を実践する	3学年とも1人1台のタブレットを持つようになり、教員と生徒の双方向の取組を研究し実践する	B	全生徒が一人1台のタブレットを持ち、教員にもタブレットも配布された。ロイロノート等の導入もあり、より活用が活発になってきた。	活用は活発になったが、「双方向」の点において検討の余地がある。研修を重ねながら研究したい。
	研修の充実	BYOD、記述式採点ソフト、校務支援システムなど、有効利用できるような研修を計画する	A	スキルアップのため、教員対象の研修会を2回実施した。少しずつ成果が出ている。	今年度の取組に加え、外部講師を招いた研修だけでなく、相互研修も実施したい。
生徒指導部	基本的生活習慣の確立	正門並びに通用門での「あいさつ運動」を実施。積極的な挨拶を心掛け、「あいさつ日本一の高校」を目指す。凡事徹底を貫き、当たり前のことを当たり前以上に取り組むことを目標とする。	A	「あいさつ日本一」の高校を目標として掲げ、自分の意思を勇気をもって表現することの大切さを、全校集会等を通じて意識させることができた。正門・通用門でのあいさつ運動は、生徒会役員とともに風紀委員も参加することで、本校の校風構築に役立つのではないかと考える。	基本的生活習慣は、自らが改善しようと意識しなければ育たない。実社会でリーダーとなるには、規範意識の徹底と相手の立場になって考えて行動する「共生の心の醸成」が必要となる。コロナ禍より欠席・遅刻が増加傾向にある。学ぶ喜びを実感でき、鍛えのある高校生活ができる生活環境を目指したい。
	交通マナーの向上と交通事故防止	平素からの声掛けを励行し、生徒の道路交通法遵守を徹底し、事故の未然防止を心がける。	A	1・2学期は、自動車や自転車との接触事故が頻繁に起こった。大事に至らなかったのは偶然と考え、命の大切さについて向き合う機会が必要ではないかと考える。3学期に入り、苦情電話を受けることがなくなったが、一時停止違反や並進が見受けられる。	帰りのSHRがなくなったために、「気をつけて帰ること」を伝える機会がなくなった。最後の授業担当者や部活動顧問が、帰宅の際には声をかけることも事故防止に役立つ。生徒に事故を起こさせないという教員の強い意識が必要と考える。
	多様化する生徒への柔軟な指導	個々の生活状況を把握し、学年との情報共有を綿密に行う。いじめの未然防止と初期対応を迅速にし、定期的ないじめアンケートの実施と個人面談を通じて風通しの良い環境を作る。	A	各考査ごとに「いじめに関するアンケート」を実施。記名式と無記名式（記名でも可）を交互に行い、生徒からの情報収集の機会を設けた。学年と生徒指導部が連携し、情報共有できるようになった。	いじめアンケートの内容について、100％確かな方法はない。「学校は聖域ではない」ことを教員が自覚し、学警連携や外部機関との連携を強化する必要性を感じている。さらに保健管理部と連携し、生徒指導と生徒支援のハイブリッドで対応したいと考える。
	自主自立の涵養	授業や部活動、諸行事を通じて自主自立の精神が育つ活動をバックアップする。学校行事を成長の場とし、生徒同士が自ら考えて活躍できる場を設ける。	A	生徒会を中心とした行事運営が出来つつあるが、企画力や議論を交わしながら積み上げていくには、さらなる努力が必要と感じた。伝統にとらわれず、今の時代の最先端を進むような奇抜な発想があってもよいのではないかと考える。	途中であきらめることなく、徹底した議論を行い、ハイクオリティな学校行事を目指したい。中学生が見ても「さすが！かこにし生！」と感じてもらえるような諸行事を作り上げたい。
進路指導部	各学年・教科・部署と連携を図り、3年間を見据えた進路指導を行う。	進路部会を中心として、進路指導部と各学年、そして各学年間での共通理解を深める。また教科指導・諸活動において、教科・部署との連携を図る。	B	学年と進路指導部との連携は意識的に図るように努め、ある程度の成果は見られたが、生徒の進路実現を具体化するためには、教科と進路指導部との連携が不可欠であると思われる。	3年後を見越した教科指導・進路指導を行うためには、生徒のキャパシティや興味関心を考慮し、教科間のバランスを考え、また、重点目標を設定しながら指導を進めていく必要がある。
	それぞれの学年に応じた講演会や説明会を実施することで、進路実現に向けての意欲、主体性を高める。	1年は文理選択、2年は大学の学部学科の内容、3年にはそれぞれの進路目標に応じた入試情報等に関する講演会を実施する。また、キャリア教育も随時実施する。（看護系・教育系・法学系）	A	学年と連携を図りながら、学年ごとに時機を考慮した情報提供の場を設定することができた。	大学を就職のための予備校的機関としてのみ捉えるのではなく、自らの興味関心に応じた学問研究の場、自身を人間的に成長させる場として捉える視点を持たせる。
	学校と保護者が一体となって生徒の進路意識向上を図る。	保護者対象の進路講演会や説明会を実施するとともに、通信、集会（説明会）等を通じて生徒・保護者への情報提供を行う。	A	随時、保護者対象の進路講演会を開催したり進路通信を発行したりして、保護者に対する情報提供に努めるとともに家庭と協力しながら生徒にとって後悔のない進路選択が行えるように取り組んだ。	進路通信を紙媒体だけではなく、スクリレ等を利用して保護者にも十分に情報が伝わるように、さまざまなメディアを活用していく。
	高大接続改革（大学入学者選抜改革）および新学習指導要領に基づく入試の対応を図る。	大学入学共通テスト4年経過の検証および対策、新科目および入試の情報を収集・整理し、職員研修や生徒への説明・指導等の対応を図る。	B	総合型選抜・学校推薦型選抜の拡大に伴う出願指導や、共通テストの新教科や出題形式を踏まえた指導において、改善の余地が残った。	推薦入試が増えていくと、特定の教員だけで小論文や面接の指導をすることには限界があるため、適切な小論文指導や面接練習のための研修会等を全職員向けにアナウンスし積極的に参加を促す。

3 令和6年度 兵庫県立加古川西高等学校 各部・学年の総括

	本年度の目標	目標実現のための具体的な取り組み	自己評価 A:できている B:少しできている C:あまりできていない D:できていない	今年度の振り返り （各目標に対する評価に対して、その成果・課題）	次年度に向けた改善策
保健管理部	安心できる居場所づくり 相談環境と相談体制の充実 個に応じた配慮や支援	・生徒が相談しやすい教職員の姿勢や相談環境、相談体制づくり ・学校不適応や心の危機的状況にある生徒を早期発見（健康観察，保健室来室状況，相談対応状況等）し、早期対応を行う ・教職員間の情報共有や研修等を通して、生徒理解を深める ・配慮や支援が必要な生徒を職員で共通理解し、個に応じた対応を行う ・心の健康課題に対して、学校全体で組織的に対応を検討する（教育相談委員会、特別支援委員会等） ・キャンパスカウンセラー、相談機関、医療、福祉、関係機関との連携心の支援組織的に行う ・相談窓口の周知を図る	B	入学時や各種検診後、学校行事前後の健康相談に加えて教育相談の案内などの相談しやすい学校環境に努めた。また、教育相談委員会や特別支援委員会において、生徒状況を共有するとともに個々の生徒支援について協議を重ねた。さらに、職員会議や研修において、全教職員の生徒支援及び相談対応への理解を深めてきた。しかしながら、欠席が続く生徒や不登校の生徒が見られた。早期に生徒の変化が把握できる組織的対策が必要と考えられる。	心身の変化を早期に把握するための健康観察のポイントを周知する。生徒のSOSをキャッチするための保健調査等の再検討。健康相談や教育相談が利用しやすい方法や案内方法の工夫。相談機関や医療機関等の案内方法の検討。校内組織、関係する委員会、関係職員との連携方法や協議方法及び内容の再検討。生徒理解や生徒支援に関する研修の充実。生徒が活躍する場を提供し、自己有用感を高める。安心できる学校環境の提供。学校生活充実への教育支援。
	健康課題に応じた生活改善や自己管理能力の向上	・健康課題の把握（保健調査，健康診断結果，保健室来室状況，災害報告書 等） ・健康課題（個々，全体）に応じた保健指導、健康相談 ・学校医、主治医、関係機関と連携した学校生活管理者の保健管理、保健指導、健康相談 ・学校医、学校薬剤師、関係機関と連携した学校感染症対策 ・学校薬剤師と連携した学校衛生管理及び学習環境の維持 ・健康管理や感染症に関する情報の発信、知識や態度、行動の育成	B	保健調査や健康診断の結果から心身の学校生活管理に努めた。特に、検診の治療勧告時や救急処置時、災害に対する状況確認、保健指導を丁寧に実施した。傷害等の災害は、昨年度に比べて大きな件数の増加や重大な事故はなく、教職員等の指導が徹底された成果と捉えている。また、生徒保健委員会による石鹸や消毒液の点検・補充活動、感染症や熱中症予防啓発放送、学校行事での救護活動、保健だよりなどは、生徒の健康的な生活を促す重要な役割を果たしている。しかしながら、健康診断後の治療勧告を受けた生徒の受診率は2割程度に留まっている。	健康診断後の治療勧告及び保健指導の徹底。生徒保健委員会活動をさらに充実させ、個々の健康管理能力の向上を目指す。
	学校危機管理体制及び学校危機対応力の向上 学校セーフティプロモーション（生活・災害・交通安全）の推進	・危機管理体制及び危機管理マニュアルの見直しと改訂 ・危機対応研修（シミュレーション訓練）の実施 ・危機（災害）を想定した訓練の実施 ・危機対応や安全管理に関する情報の発信 ・教職員，生徒，保護者，関係機関，地域等と協働して取り組む危機管理体制の検討	A	危機管理マニュアル（保健）の見直しを行った。また、危機的な状況を想定したシミュレーション研修や訓練を取り入れた。個々の役割を確認したり、組織としての対応を検討することができた。3月には、総務図書部と共同して計画した危機対応・避難訓練を実施する予定である。視覚・聴覚の多様性や傷病者を想定した避難（担架や車椅子、搬送や護送）により、危機対応能力の向上を図る。	継続的にシミュレーション型の研修や訓練を導入し、危機に備える。危機対応力の向上を図る。また、学校セーフティプロモーションの確立に努める。
企画広報部	管理職、各学年、各学部との連絡調整をしながら、新しい企画提案	企画広報部内での企画会議で提案し、各学年の要望を聞きながら、調整する。全校生に向けた講演会の実施。	B	学校行事や学年行事のサポートを行った。今年度は費用の都合により、全校生徒を対象とした講演会の実施は見送ったが、選挙や主権者教育、加古川制服コレクションなど、外部との連携事業は増加した。	部署再編のため、新部署での実施。全校生への講演会は、ぜひ実施したい。
	「総合的な探究の時間」の充実と学年間の調整、連携を図る。	各学年の年間計画を立て、それに基づいて3年間の計画を立案し、担当者への研修を実施する。	B	3年間の実施内容が定着し、安定して実施できるようになってきた。一方で、担当者への研修は実施できず、生徒の探究内容に十分な深まりが見られない課題が残った。	学年間との連絡調整をより密にする。加古川西校の探究の型を定着してきたので、より発展した探究活動が出来るようにしていく。また、学年・教員・生徒が取り組みやすくしていく。
	特色類型の受験者数増加の対策をしつつ、県立高等学校教育改革第3次実施計画にのっとって特色類型の検討をする。	特色類型の内容を理解してもらい、広報活動をおこなう。内容については、特色類型検討委員会で検討をすすめる。	B	今年度の特色類型の受検者数は48人で、昨年度とほぼ同数であった。中学校訪問や夏・秋のオープンハイスクールにおいて国際市民類型の広報活動を行い、徐々に理解が深まってきていると考える。	特色類型に関する広報活動をさらに強化する。可能であれば、特色類型に特化したオープンハイスクールの開催も検討する。また、今後の特色類型の在り方について長期的な視点で議論する場を設ける。
	地域や中学校に、加古川西高校をより深く理解してもらうための広報活動	中学校訪問の実施や夏、秋オープンハイスクールの実施	B	年間2回の中学校訪問を実施し、第3学区の学校を訪問した。本校への評価は非常に高い。今年度は文化祭のチラシを配布して参加を呼びかけた結果、多くの中学生が来場し、広報の場として大きな効果を上げた。	中学生への直接的な広報の機会をさらに拡充していく。今年度実施したように、文化祭への来場を促進し、参加者を増やすことを目指す。また、塾など新たな広報の場を開拓することも検討する。
第1学年	「自信・創造・自立」を教育目標とし、西高生としての誇りと自信を持つ生徒の育成	手帳を活用しながら、時間の使い方について管理・工夫をし、日常生活や学習習慣の確立を目指す。各行事や考査ごとに振り返りを促し、自分のポートフォリオを作成させる。	B	手帳を活用した時間管理や学習習慣の改善に取り組んだが、個人差が見られた。積極的に活用し、計画的に行動できた者がいる一方で、十分に活用できなかった者もおり、全体としての定着には課題が残った。各行事や考査ごとの振り返りについてはしっかりとこなせた。	本校生としての誇りを持つ生徒の育成という目標を踏まえ、計画的な時間管理や振り返りを徹底し、次の行動につなげる意識を高める。自身の成長を実感できるよう、主体的に考え行動できる力を養い、自律した学習・生活習慣の定着を図る。
	基礎学力の定着を図る。	授業中心の学習習慣を身につけさせる。小テストなども活用し、リズムよく学習できる環境を整える。	A	授業中心の学習習慣の確立に取り組み、小テストなどを活用しながら学習リズムを整えた。その結果、着実に学習習慣が身につき、安定した成果が見られた。また、学年集会ごとに小テストでの優秀者を表彰し、学習意欲の向上を図った。	国・数・英については、引き続き小テストを週1回実施し、学習のリズムを整える。授業を中心とした取り組みは継続しつつ、2年後半からは、応用力も養うような授業や課題を考えていきたい。
	集団のにおける各自の役割を認識し、よりよい集団づくりを意識させる。	LHR、探究活動、学校行事などを通して、自己の役割を考えて行動するように促す。共に信頼感をもって目標に向かって活動しようとする態度を育てる。	A	LHR、探究活動、学校行事を通して自己の役割を考え、行動することを促してきた。その結果、生徒は自身の役割を理解し、主体的に動く姿勢が見られるようになった。さらに、仲間と信頼関係を築きながら、目標に向かって協力して取り組む態度も定着した。	探究学習においては、自分たちで課題を発見し、探究する活動へと移行していきたい。HR活動においてもより主体性を持って行動するように促す。修学旅行に向けて、生徒中心で行動できるように、集団における役割・規律を認識させる。
	保護者との連携を図りながら、より深い生徒理解に努める。	学年通信やHP等を利用して学校生活の様子を保護者に伝えると共に、保護者会や三者面談を通じて双方向のコミュニケーションを円滑に行い、相互理解に努める。	A	保護者との連絡をできるだけ密にとるようにした。また月1回の学年通信で全体の様子を伝えることができた。Classroomやスクリレを活用し、お互いの負担を減らしつつ、必要な時は電話連絡等の直接的な会話を通じて、保護者と連携を深めることが出来た。	学年通信を月1回のペースで発行するとともに、学年のHPで行事などの様子を伝えるようにする。また保護者との連絡を密にし、三者面談などを通して双方向のコミュニケーションを円滑に図るよう努める。

3 令和6年度 兵庫県立加古川西高等学校 各部・学年の総括

	本年度の目標	目標実現のための具体的な取り組み	自己評価 A:できている B:少しできている C:あまりできていない D:できていない	今年度の振り返り （各目標に対する評価に対して、その成果・課題）	次年度に向けた改善策
第2学年	自律・自立を目指した学校生活を送らせる。	「今未来手帳」の活用を促し、目標を立てさせ、学習・生活習慣の確立を図る。自己を振り返り、反省点を活かして向上に努める機会を多く設ける。	B	「今未来手帳」については、活用できている生徒とできていない生徒の差が出ているように感じる。2年生になり、日々あわただしい生活を送る中で、学習習慣が確立できていない生徒に対して今後どのように改善させていくかが課題である。	3年生を迎えるにあたって、生徒自身の自己管理はさらに必要になってくる。担任と生徒の二者面談を通して、一人一人の生徒に意識を持たせていきたい。
	進路実現に向けた基礎的な学力の定着を図り、目標に向かって努力する姿勢を育む。	授業を中心とした学習を促し、予習・授業・復習のサイクルを確立させる。より幅広い選択肢から、進路目標を設定させ、達成に向けて自主的に学習する姿勢を養う。	B	授業を中心とした学習習慣に、多くの生徒が慣れてきていると思う。今後は各自の進路実現に向けて、どのように取り組むか、具体的に考え取り組ませていく必要がある。	引き続き授業を中心とした、学習習慣を継続させながら、進路指導部と連携し、進路実現に向けて、より具体的な指導方法を考えていきたい。進路講演なども充実させていきたい。
	生徒が主体となって、向上できる集団を目指す。	学校行事や探究の時間を含めた教育活動を通して、一人一人の生徒が活躍できる場を設ける。他者を気遣いながら、チーム78回生の一員として何ができるかを考えて行動する姿勢を養う。	A	修学旅行、文化祭などの学校行事で、生徒たちが主体的に考え、行動する姿が見受けられた。チーム78回生という意識が根付いてきていると感じる。今後はより多くの生徒が活躍できる環境を作っていきたい。	最高学年として、生徒主体で行事が進められるように促していく。チーム78回生として、受験期も乗り越えられるよう、意識させていきたい。様々な生徒が活躍できるように、学年団で声かけを行っていきたい。
	保護者との連携を図りながら、より深い生徒理解に努める。	定期的に二者面談・三者面談を行う。学年通信やHP等を通じて学校の情報や生活の様子を保護者に伝える。5月・10月に保護者会を開催し情報共有を図り、相互理解に努める。	A	三者面談、保護者会などを通じて意見交換の場を設けることができた。特に10月の保護者会には多数の保護者が出席された。月1回の学年通信や、スクリレを通して、必要な情報共有ができたと思う。	より丁寧な三者面談を実施する。保護者会などで、具体的な進路情報提供ができるようにしたい。また、学年通信やスクリレを通して情報共有をしていきたい。
第3学年	基本的生活習慣の徹底を図らせ、心身ともに健康で充実した高校生活を送らせる。	日々の生活の充実感・達成感の向上に向け、スケジュール管理や振り返りを大切にするよう声掛けをする。	B	進路実現に向けた日々のスケジュール管理や心身の健康維持の大切さについて、HR等を通じて常に確認してきた。2学期以降の欠席増加は、受験を控えた精神的疲労によるものも少なからずあった。	日々の連絡やスケジュール管理については、生徒のデジタル端末も効率よく活用しながら、自己管理を徹底させる。2学期以降の欠席増加への原因追及とその対策について考える必要がある。
	進路実現に向けて、基礎事項をおざなりにすることなく、発展的な学習にも意欲的・継続的に最後まで努力する姿勢を育む。	授業に加えて補習講座・個別指導などを数多く設定し、時機を図りながら提供する。生徒の学力実態と希望進路に応じた内容になるよう教材を精選し、意欲をもって継続的に学習に取り組める環境を提供する。	A	基礎学力の定着と応用力の育成を目指し、授業に加え補習講座・個別指導を充実させ、時機を図りながら提供してきた。2月現在も粘り強く努力を続けている生徒を、職員が一丸となってサポートし続けている。	進路実現に向けた学力向上のための環境作りうを行うとともに、生徒自身が自分を客観的に見つめ直し、こだわりや信念をもって学習に取り組めるよう、より丁寧な自己分析を行わせる。
	自己実現にむけて、仲間と共に励ましあいながら、何事も最後までやり切ろうとする精神力を育む。	授業、LHR、行事、部活動等のすべての教育活動で最大限の自己表現ができるよう、振り返りや改善策を考える機会をつくる。最後の1年を大切に過ごせるよう声掛けをし、何事も仲間との信頼感をもって達成させる。	A	最高学年としての自覚を持ち、主体的に、共に支え合いながら、何事も最後までやりきるよう声掛けを行ってきた。特に行事や部活動では、生き生きと活動する姿が見られ、生徒の満足度も高かったように思う。	最後までやり切ることに加え、そこで力を発揮できるような精神力を養い、互いに励まし高め合える人間関係や雰囲気を醸成するために、自己肯定感を高め、人と関わる質の高い活動をさせることが必要である。
	保護者との連携を図り、より深い生徒理解に努めながら、卒業と進路実現をめざす。	学年通信やHP等を通じて学校の情報等を保護者に明確に伝える。定期的な二者面談・三者面談、5月・10月の保護者会等を開催し、進路についての情報共有を図りながら、個々に応じた丁寧な進路指導に努める。	A	HR担任による定期的な二者面談・三者面談に加え、個々の生徒の状況を踏まえながら、必要に応じて適宜面談を重ね、丁寧に生徒を理解するとともに、保護者を交えた進路指導に努めることができた。	保護者会での外部講師による講演会については、特に受験生の保護者という点を考慮し、そのテーマや内容を精選し、よりニーズに合った内容を提供できるよう工夫をする必要がある。